

仮面ライダーブレイド
外伝 復活のK

ぽかんむ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの戦いから幾星霜……奇怪な生物を引き連れた一人の少年によって、人類は再び滅亡の危機にたたされた。

果たして再集結をしたかつての仮面ライダー達は剣崎の守った世界を守りきれれるのか？

目次

仮面ライダーブレイド外伝 復活のK

1

仮面ライダーブレイド外伝 復活のK

2005年1月、人類の命運をかけた戦いは終わりを迎えようとしていた。

仮面ライダーブレイドⅡ剣崎一真とジョーカーアンデッドⅡ相川始は、山中で死闘を繰り広げていた。

激戦の末にお互いの身体はボロボロになる。そして遂に、剣崎はジョーカーになってしまった。理由はキングフォームを酷使したからだ。

しかしそれが、剣崎の狙いであった。彼がアンデッドになったことで、バトルファイトは続行する。これにより、始を封印せずに、人類滅亡を回避することに成功した。

だが、その代償は大きい。

「剣崎……」

「来るな！ 俺とお前は……アンデッドだ……俺たちはどちらかを封印しない限り、バトルファイトは決着せず滅びの日は来ない」

「だから……俺達は戦ってはいけない。近くにいては……いけない」

「……いくら離れたところで……統制者は俺達に戦いを求める。本能に従い戦う……そ

れが……アンデッドの運命だ」

「俺は運命と戦う。そして勝ってみせる」

「それが、お前の答えか」

「お前は人間達の中で生き続けろ」

「どこへいく……?」

「俺達は二度と会うことはない、ふれあうこともない、それでいいんだ」

「剣崎……」

「剣崎！」

立ち去る剣崎。

その後を追う始だが追い付けない。

やがて木々を抜けて、崖に辿り着いた。そこに橘朔也と上城睦月も駆け付ける。三人は立ち尽くすしかなかった。

「けんぎききいいいい!!」

橘の叫び声は、水平線がくつきりと見られる綺麗な海と、雲一つない青空、飛び立つ

カモメの群れが織り成す空間に響き渡った。

12年もの歳月が流れた。昼間の草原に、ヨウという名の少年が佇む。

彼はボールから、モンスターを出した。

「ここがブレイドの世界か……ジョーカーを倒してつれてこい」

命令を聞いた白きモンスターが、高速で飛び立つ。衝撃によって、突風が吹き荒れた。草むらは揺れ、キーンとした轟音が鳴る。

「バトルファイトの勝者には万能の力が手に入る……か。待っているリーリエ……」

彼の左手には一冊の本と、一枚のカードが握られていた。

物静かな場所に位置する喫茶店―ハカランダー。

ジョーカーこと始は、現在もここに住んでおり、従業員として働いていた。同時に真崎剣一という名前で、カメラマンとしても活動している。

客にお冷やを渡すため、彼はトレイを持って歩いていた。そのとき、何物かの接近に気付く。

アンデッドの気配とは異なるが、人間や他の動物のものでもない。

「逃げろ！」

始が叫んだ。店長の遥香が驚く。彼は彼女に、客を逃がすように伝えた。

理解の追いつかない遥香だったが、始は仕事中にふざけるようなことはしない。彼女は彼を信用し、客を非常口に案内した。

五人ほどの客は、一目散に逃げ出していく。

全員の避難を確認した遥香も、その後を追った。店内には始が一人残り、敵の襲来を待ち構える。

「どこからでも来い」

突如、窓ガラスが一齐に割れる。そこから現れたのは、白い身体をもった異形の”なにか”だった。名をフェローチエという。

その姿は、かつて自分自身や地球全体を苦しめた、ダークローチを彷彿とさせる。

「目的は何だ？」

問いかける始だが、フェローチエは何も答えない。

するとフェローチエは、いきなり高速で辺りを駆け回り始めた。あまりの速さに、始は目が追い付かない。

フェローチエの飛び膝蹴りが放たれた。

始はそれを顎に喰らい、倒れてしまう。なんとか立ち上がるも、傷口からは緑色の血が付着していた。

「速い……！」

ハートのカテゴリー2、スピリット以外のラウズカードを持たない今の始に、勝ち目

は薄い。

フェローチエの虫のさざめきが鳴り響く。残りの窓ガラスもすべて割れ、ガラス製のコップも次々と破裂していった。

彼も大いに苦しめられる。

「はあ…… はあ……」

始を衝撃で、壁まで吹っ飛ばされた。もたれ掛かっている始。フェローチエが一步ずつ、距離を詰めていく。

今の始がフェローチエに勝つにはもはや、本来のカージョーカーの力を解き放つしかない。

けれども”人間たちのなかで生き続ける”という剣崎の言葉から、踏み出すことが出来なかった。

そのときだった。フェローチエの背中を、弾丸が襲いかかったのだ。

フェローチエは極めて耐久力がない。だからフェローチエはそれを受け、地に膝をつけた。

「始、カードを受けとれ！」

レッドランバスに跨がる赤いライダー―仮面ライダーギヤレン―。彼は始に、ハートのカテゴリ―Aを投げつけた。

始はそれを手にすると、腰にカリスラウザーを出現させる。

「変身」

掛け声と共に、カードをスリットに通らせる。仮面ライダーカリスへの変身が完了した。

醒弓カリスアローを出現させると、フェローチェ目掛けて走り出した。

銃撃を受けたフェローチェに、更に斬撃が迫り来る。

何度かは避けられた。しかし、その素早さは既に失われている。フェローチェは次第に追い詰められていく。

「残りのカードだ」

ギヤレンがカリスの元に辿り着く。彼は残る11枚のラウズカードを渡した。

カリスはそれを、左腰に一度しまう。それから、カテゴリー3、6を取り出した。

カリスアローにカリスラウザーを取り付けると、先程手にした2枚を読み込ませる。

読み込みが完了した。カリスの右手が風に覆われる。

彼の手刀が降り下ろさせた。肉を断ち、骨を砕き、フェローチエの細い身体を破壊し尽くす。

スピリットのカードを使い、カリスは始の姿になった。彼の眼前には、赤い鮮血に包まれた肉片が散らばっている。

ギヤレンも変身を解いた。始は橘に問いただす。

しかし詳しい事情は、橘もよくわかっていなかった。

彼の研究所に、六体の未確認生物を見たとの情報が入ってきた。橘は半信半疑ながら、バイクを走らせて探していた。追加の情報によって、その内の一体がハカランダに迫っていることを知る。

そして二人は、再会したわけだ。

話を聞いた始は、橘に協力することにした。

草原にて、二人の男が対峙していた。

うちの一人はヨウだ。彼はタブレットの様なものを眺めながら、顔をしかめている。

「ちっ……フェローチエの反応が消えやがった。殺されたか。だがもう一体のジョーカーを封印すればどっちみち同じことだ。そうだろう？」

もう一人は、失踪した剣崎だ。ヨウは何らかの手段で、剣崎を見つけ出していた。

「目的は何だ？」

「お前を封印する」

「封印だと？ 俺を封印したらこの世界は今度こそ滅びる！」

「安心しな？ 俺がその世界を救ってやるからよ！ 行け！」

ヨウが5個のウルトラボールを投げた。中から現れたのはウツロイド、カミツルギ、マッシブーン、テツカグヤ、デンジユモク。いずれも強力なポケモンたちである。

「お前たち、奴の動きを止めろ！」

5体は畳み掛けるように、剣崎へ攻撃を仕掛けていく。

アンデッドであるため死ぬことはないが、かなりの苦痛である。

だが、歴戦の戦士がその程度でくたばることはなかった。

剣崎はオールオーバー―コーカサスビートルアンデッドの持っていた剣―を召喚する。それを振り回して、ウルトラビーストたちを風ぎ払った。

「流石は元仮面ライダー。だけど俺には切り札がある！」

オールオーバーが上段から降り下ろされる。テツカグヤは真つ二つに切り裂かれた。しかし一体倒したのも束の間、剣崎はデンジユモクのコードに囚われてしまう。

「よくやったデンジユモク。剣崎 一真、これが俺の切り札だ。どこかで見覚えはないか？」

「そのカードは！」

ヨウは動けない剣崎に、カードを近づける。それが触れた瞬間、剣崎の身体は消え去った。あとにはジョーカーのカードのみが残る。

「人類を滅亡させるわけにはいかないな。変身」

左腕のカードリーダーにカードが入る。姿が異形のものに変わった。胸部にはヨウの顔が浮かび上がる。

「さてと、もう一体のジョーカーを封印しに行くか」

残る4体のウルトラビーストをボールに戻すと、彼は日本へ飛び立った。

始は橘の研究所に連れてこられた。かつて、仮面ライダーレンゲルとして人々の為に戦った上条睦月の姿もある。会社が休みだったため、橘に召集されたのだ。

睦月は現在、ごく一般的なサラリーマンとして暮らしている。

仕事は忙しいが、充実感のある毎日を過ごしているらしい。

睦月に挨拶をしているときに始は、何か嫌な予感を感じた。それはすぐに、不気味なほど完全に消え去る。

彼は恐れるでもなく、悔るでもなく、ただただ困惑状態に陥った。

彼の思考は、橘の部下の言葉によって遮られる。彼によると、ここから南西20kmの地点に未確認生物が現れたようだ。

3人は研究所を飛び出した。バイクに跨がり、目的地に急行する。

「ほんとに懐かしいですよね。仮面ライダーとして戦うなんて」

「そうだな。これであいつがいれば……」

「剣崎……今はどこで何をしているんだ……」

会話を花を咲かせつつ、3人はバイクを走らせた。十数分ほどで、彼らは現場に到着する。

三人に見覚えのある怪物がそこにはいた。その正体はケルベロス。天王寺の作り出した人造アンデッドである。ヨウがそのカードで変身しているため、戦闘力はさらに上昇していた。

ケルベロスは肩から火炎弾を放って、ビル郡を破壊していく。

「どうしてケルベロスが……?」

「そういえばケルベロスのカードは、ダイヤのカテゴリーKが封印されてから行方不明になっていたな。まさかそれをどこかで手に入れたのか?」

睦月の疑問に、始が答える。

ケルベロスのカードは、ギラファアンデッドが落としたりと、岩の間に挟まっていた。ギラファアンデッドはすぐあとに、ギャレンと共に海中に没し、封印された。

海面に漂うダイヤカテゴリーのカードを、剣崎たちが拾い集める。彼らが撤収したあと、ケルベロスのカードは風によって水没した。

それから12年後。ヨウは苦心の末、ケルベロスを探し出したのだ。

「何故こんなことをする!」

橘がケルベロスに問う。

「お前たちに用があるんだよ。正確にはジョーカーに、だけどな」

「俺にだど？」

「貴様を封印して俺がバトルファイトの勝者になる。そうすれば万能の力が手に入る。それを使って俺は、最愛の人を取り戻す！」

「そのために大勢の人々を巻き込もうというのか！ それにどこでそんなことを？」

睦月も疑問を投げかけた。

「この本が俺に教えてくれたのさ」

ケルベロスはどこからともなく、一冊の本を取り出した。

3人はそれを見て驚愕する。それは白井虎太郎の書いた当時の大ヒット小説―仮面ライダーという名の仮面―であった。

一年間に及ぶ剣崎達の激闘を書き綴ったもので、現在でも度々話題に上がる程の作品

だ。

「変身！」

3人はそれぞれ、仮面ライダーに変身した。

ケルベロスの投げたボールから、ウルトラビーストが飛び出す。

彼らの戦いの火蓋が、切って落とされた。

醒杖レンゲルラウザーを構えるレンゲル。

マツシブーンも独特の構えで牽制している。

レンゲル「行くぞ！」

レンゲルが槍を、大きく振り回す。マツシブーンはかわそうとせず、身体で受け止めた。

マツシブーンの尖った口が襲いかかる。

レンゲルは咄嗟に、クラブのカテゴリ9をラウズした。効果は煙幕。それを用いて隙を作り出す。

レンゲルは煙幕に身を隠しながら、マツシブーンの背後にまわった。

彼は斬撃を繰り返し出し、さらにマツシブーンを突き飛ばす。そして2枚のカードをラウズした。

槍から手を離して飛び上がる。足から冷気を放ち、マツシブーンを凍らせた。そのまま挟み蹴りーブリザードクラッシュを喰らわし、マツシブーンを砕く。

デンジユモクの放電をかわしつつ、カリスが接近した。彼はカリスアローで、敵を切り裂いていく。

カリスラウザーを弓に装着すると、3枚のカードを読み込ませた。

渦巻きがカリスを包みながら高速で回転し、空中に浮遊する。

デンジユモクが放電した。カリスはそれを無視して、ドリルキックスピニングダンスを放つ。電撃ごと、デンジユモクの身体を貫通した。

一息つく間もなく次の敵、カミツルギが近づいてくる。

「雑魚の癖に数ばかり多くて厄介だ」

カリスラウザーをベルトに戻しハートのカテゴリーKをラウズする。彼は13枚、すべてのハートスーツと融合を果たし、ワイルドカリスへと変貌を遂げた。

新たな武器・ワイルドスラッシャーを手に持ち、斬り合う。両者の刃が幾度なく交わされる。

鎌を振り上げて、カミツルギの小さい身体を吹き飛ばした。彼は鎌を折り曲げると、カリスアローに装着する。

彼はワイルドのカードを精製した。それをラウズし、巨大な光線を発射する。

カリス最強の技・ワイルドサイクロンは、カミツルギを木っ端微塵に消し去った。

ギャレンラウザーの弾丸と、パワージェムが激しくぶつかる。

両者引くに引けない攻防だ。

パワージェムをかわしつつ、ギャレンは左腕のラウズアブゾーバーを操作した。

彼はカテゴリーと融合し、ジャックフォームになる。空中へ舞い上がり、銃撃を

浴びせた。しかし、ウツロイドには効いていない。

ウツロイドがパワージェムを連射する。持ち前の機動力を活かして、ギャレンはかわしていく。

彼は有効打に繋げることができない。

そんな中、一発のパワージェムが命中した。ギャレンは墜落してしまう。

発射されたヘッドロ爆弾。ギャレンはジェミニのカードをラウズする。分身を身代わりに、彼は攻撃を防いだ。

彼はカードを二枚ラウズする。

炎を纏ったドロップキックバーニングスマッシュをウツロイドに放った。

相性が不利なため身体を破壊することこそ失敗したが、命を奪うのには十分な威力を誇る。

三大ライダーの活躍により、ウルトラビーストは全滅した。しかしケルベロスはまだ、落ち込む様子を見せない。

彼は漆黒のカードを取り出すと、ライダーたちに見せつけた。

「そのカードは……剣崎か？」

研究所にいたとき、始は嫌な予感を感じていた。その正体は、一瞬だけアンデッドが一体になったことによるもの。つまり、剣崎が封印されたことだ。

ギラファアンデッドが封印されたあと、始はジョーカーの本能に苦しめられていた。そのときと同じようなことが、先程起こっていたのである。

「ここからが本番だ！」

ケルベロスは左腕に、そのカードを挿し込んだ。途端に、ケルベロスが苦しみ始めた。左腕を抑える。

二体の超強力なアンデッドを支配下に置くのは、そう易々と出来るものではない。絶叫の最中、ケルベロスはその姿を消した。

しかし決して、負荷に耐えきれず自壊したわけではない。ケルベロスは一瞬で、レンゲルの背後に移動していた。レンゲルが気づく前に、ケルベロスが攻撃する。長い爪は簡単に、レンゲルを吹き飛ばした。

「これがジョーカーの力！ 素晴らしい！」

ケルベロスの胸部は、ジョーカーの頭に変わっていた。

ワイルドカリスですら、その素早さを視認することはできない。

ギャレンが銃を乱射する。だが、速すぎて当たらない。

「喰らえ！」

放たれた怪光線は、辺り一面を焼き払う。

その威力は凄まじく、周囲の建物は粉々になった。

ギャレンはバレットとファイアをラウズした。ギャレンラウザーから燃える弾丸を撃ち出す。

それはケルベロスⅡの左腕を掠めるも、ほとんど効いていないようにみえた。

「貴様ら雑魚がいくら足掻いても勝てるわけがなからう！俺が万能の力を得るんだ

！」

「万能の力……12年前の惨劇を知りながら、それでも叶えたい願いなんてものがあるのか!？」

橘が問いたです。

「当たり前じゃん……俺はリーリエに会いたんだよ！ それに12年前のこととか本でしか知らないよ。俺は別の世界からバトルファイトの話を聞き付けて、やって来たんだぜ！」

別の世界という言葉に、彼らは理解が遅れた。しかし確かに、ウルトラビーストやポケモンは、この世界には存在しない。

証拠が提示されている以上、納得するしかなかった。

「ジョーカー！ さっさと封印させろよな！」

「剣崎に救われたこの命を無駄にするわけにはいかない！」

「お前だけは俺達の手で倒す！」

ギャレンはラウズアブゾーバーを展開した。中にはダイヤのJ、Q、Kが収納されている。

アブゾーバーに、カテゴリーQが装填された。

「遊ぶのも飽きたし、お前らを消し去ってやるぜ」

極太の禍々しいビームが襲い掛かる。直撃すればまず助からないだろうと思われたとき、金色の光が始たちを守りきった。

エボリユーションキング！

「俺はなってみせる！ キングフォームに！」

光が途絶える。重醒銃キンググラウザーを携え、ギラファアンデッドとの融合を遂げたギャレンが、そこに立っていた。

「ほう……少しは楽しめそうだな！」

「いいか……奴には正面からやりあっても勝てる見込みは薄い……だから狙うべき位置は……」

ギヤレンは他の二人に、作戦を伝えた。二人は賛同する。

キングラウザーから光弾が放たれた。避ける隙を与えず、ケルベロスを吹き飛ばす。ワイルドカリスがワイルドスラッシャーを持ち、追い討ちをかける。

ケルベロスが爪で応戦を始めた。互角の戦いが繰り広げられる。

始はこのときまでに、ケルベロスの動きに慣れていた。さらに素早さを上げ、斬撃を繰り返す。

ケルベロスはワイルドカリスの腕を弾き、鎌を落とさせた。そのまま、左爪先をカリスの胸に突き刺す。

緑色の血が、傷口から吹き出された。カリスは激痛に耐え、ケルベロスの左腕を掴む。

「今だ、睦月」

レンゲルはブリザードベノムを発動した。レンゲルラウザーにありつただけの力を込め、ケルベロスの左腕を貫いた。

「せめて剣崎のカードだけでも返してもらおう」

ケルベロスのカードは強く結びつけられているため、奪うことはできなかった。しかし、ジョーカーのカードを回収することには成功する。

「ちくしょう……力が失われていく……」

カリスはケルベロスに、傷口を更に抉られる。彼は血を飛沫のように上げながら倒れた。

ギャレンは五枚のラウズカードを、キングラウザーに入れていく。

レンゲルは槍を振り回して、ケルベロスに飛びかかった。

しかしケルベロスは、肩から火炎弾を放出する。それを受けたレンゲルは、遠くに吹き飛ばされてしまった。

「弱体化したとは言え貴様らに遅れを取ることはない！」

ギャレンがカードを入れ終わった。彼の前に、五枚のカード型のエフェクトが現れる。彼は引き金を引いた。

キングラウザーから発射された光線——ロイヤルストレートフラッシュ——は、それらを

通過することに威力やスピードを増していく。そして一直線に、ケルベロスに襲いかかる。

ケルベロスを中心として、爆発が発生した。

風に吹かれ、煙が徐々に止んでいく。

ギャレンはキンググフォームに身体が耐えきれず、解除されてしまう。

「剣崎はこれ以上の苦しみに耐えながら戦い抜いたのか……」

「ビツクリさせやがって。少しヒヤヒヤしたぜ」

ギャレンの攻撃は決して、効いていないわけではない。しかし致命傷とはなり得なかった。

「橘……剣崎のカードを受け取れ。それをどう使うかはお前次第だ」

始がカードを投げつける。ギャレンがそれを掴んだ。始は力尽き、気を失う、

『やっぱり一流だよな、橘さんは』

『例えカードが一枚もなくとも、お前を封印できるはずだ！俺に仮面ライダーの資格があるのなら！』

『戦えない大勢の人たちの代わりに俺が戦う！』

『俺は運命と戦う、そして勝ってみせる』

橘の脳内に、剣崎の記憶が巡っていく。彼は一か八かの賭けに出ることにした。戸惑いを捨て、行動に移す。

「剣崎……俺に力を貸してくれ！」

ラウズアブゾーバーに、剣崎のカードをラウズした。

ギャレンの姿が変わる。まるで、ジョーカーと仮面ライダーが融合したかのようなものになった。

醒剣ブレイドラウザーを召喚すると、彼はケルベロスに斬りかかる。

「まだやるつもりか！最後まで付き合ってやる！」

「貴様だけは……貴様だけは俺の手で倒す!!」

ギャレンは上昇した融合係数を力に変えた。反撃も恐れずに何度もケルベロスを切り裂く。

また、ギャレンラウザーで零距离射撃も行い、的確にダメージを与える。

「まさか……これほどの……パワーが……」

「俺はすべてを失った……信じるべき正義も、組織も、愛するものも……なにもかも……だから最後に残ったものだけは失いたくない……信じられる……仲間だけは！」

ギャレンはブレイラウザーにキック、サンダー、マツハのカードをラウズした。ブレイラウザーを地面に突き立て、助走をつけて空中へ高く跳ぶ。

「剣崎!!!」

足に雷を纏い、ライダーキックーライトニングソニックーを放つ。ケルベロスが両手の爪を交差させ、キックを受けた。

限界が近づく中、両者は気力を振り絞る。ケルベロスが腕を開いた。ギャレンは弾き

飛ばされる。

「(っ)まで……か……」

ギャレンに横から、光線が浴びせられた。放っているのはレンゲルだ。

するとブレイドが現れた。レンゲルのリモートによって、剣崎が解放されたのだ。

落ちるギャレンは、レンゲルが受け止める。

ブレイドがライトニングソニックを繰り出した。まさかの二連撃を、ケルベロスは予想していない。

ブレイド渾身のライダーキックが、ケルベロスを貫いた。そしてその強大な力を無に帰す。

「(っ)は……っ。」

変身を解いた剣崎。睦月と橘も元の姿に戻る。

「橘さん！　ご無沙汰してます！　睦月、元気にしてたか？」

劍崎は二人と、挨拶を交わした。離れていた時間は長いが、絆はまだ残っている。いつの間にか、始は姿を消していた。

劍崎と再会し、闘争本能が掻き立てられるのを防ぐためだ。

「すみません橘さん。俺もう行きますね」

劍崎が話を切り出す。悲しむ二人だが、彼の戦いを考えると、引き留めることはできない。

空から黒い石板が飛来した。

それは倒れていたケルベロスを封印すると、劍崎に戦いを促す。

これ以上の長居は危険と、劍崎は判断した。後ろを振り返り、その場から離れようとする。

気がつくともノリスは既に消えていた。

橘と睦月が劍崎に宣言する。

「俺も俺の運命と戦う」

「俺もです。誰でも運命と戦うことは出来るはずです……違いますか?」

「頑張ってください。二人とも元気で! 始! 近くにいるんだろ? お前もな!」

剣崎は三人に別れを告げた。突風が吹き荒れる。瞬間的に、彼の姿が橘たちの視界から消えた。

「剣崎……俺は……これから人間たちのなかで生き続ける」

始も決意を新たにし、次なる未来を目指す。